

御木本幸吉の代表的発明(養殖真珠)

御木本幸吉は、志摩の天然真珠を博覧会に出品した際に水産学界の権威である箕作博士と知り合い、アコヤ貝の中に砂などの異物が混入すると、身を守るために真珠質を分泌して異物を包みこみその層が厚みを増して真珠となるというアドバイスを受け、人工的に真珠をつくる研究に取り組みました。

やがて、養殖したアコヤ貝の殻の内面に半円形の真珠を作り出すことに成功し、明治29年に特許を取得しました。この成功をもとに、真円真珠を養殖真珠で作り出すための研究を続け、核の周囲に真珠質を取り巻かせる方法によって真円の真珠をつくり、世界で初めて養殖真珠の企業化に成功しました。

この真珠は、当時日本を代表する輸出品として「ミキモト・パール」の名で世界に普及し、世界の真珠市場の6割を占めるに至りました。



養殖真珠